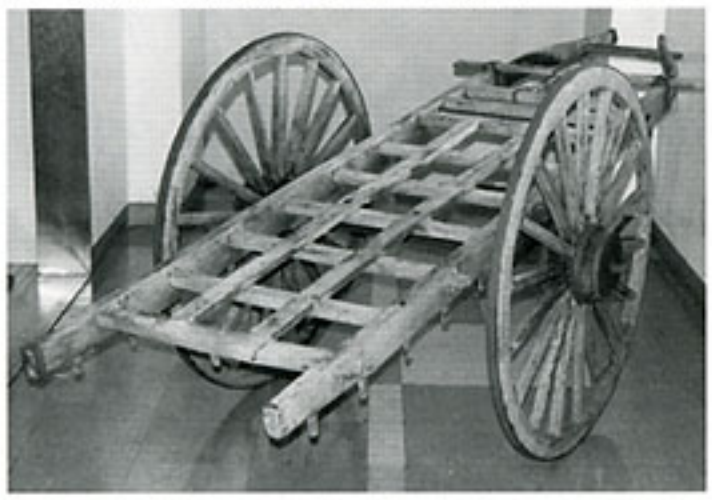
かたりべ 85・86

合　併　号

豊島区立郷土資料館だより

上：さまざまな種類の籠　1997年11月調査
下：大八車　野菜籠はどのように積まれたのだろう



旧田島平良家長屋門　1953（昭和28）年撮影　田島平良氏提供

十年の歳月をかけて報告書を刊行

『旧田島平良家長屋門総合調査』

豊島区千早が、神田市場では「西山（にしやま）もの」として名が通るほどの野菜を生産していた地域だったことは、人から聞いたり本に書かれてあることから知られています。しかし、鍬を持って汗水流して働いたとか、その光景を見たという方は少なくなっています。

ところで、一九九七年まで、千早には、長屋門とそれを守るかのような高木によって作られた垣根のような防風林があり、区内で唯一江戸近郊農村の景観を伝えていました。そのことは、広報等によって広く区民に知られていましたが、やむをえず取り壊されることとなり、「では、長屋門を記録として残そう」と、多方面からの調査をしました。建築学的調査・樹木の種類の調査・収納されている農具類の調査、さらに、長屋門の取り壊した後には、それが建つ前の土地の状況を知るための発掘調査も行ないました。

長屋門のなかに納められていたものは、所有者の方から寄贈していただきました。当館の作業場所や収蔵庫が狭いこと、館蔵資料を別の建物に引越さなければならないということがあったために調査作業が中断し、本書の完成には長い歳月がかかってしまいましたが、各々の報告を、丁寧に行なうよう努めました。本書は、約二〇〇頁で、建築・民具・発掘調査の図面も掲載されています。また、その他の詳細なデータは、図面と一緒にCD―Rにして添付しています。同書は、私たちが忘れかけていた大切なことを呼び起こしてくれることでしょう。地域の歴史を記録することを趣旨とした内容ですが、旧所有者のご理解により実現しました。みなさまに、ご一読をおすすめします。

（福岡）

セピア色の記憶

第19回　短命だったトロリーバス

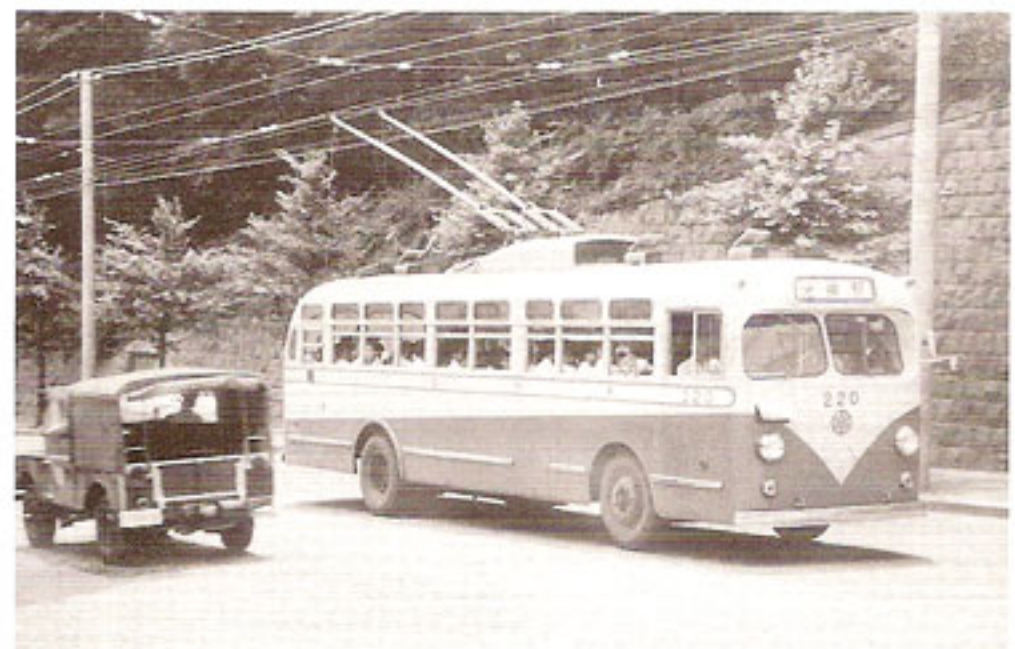
左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和四三（一九六八）年三月と現在（二〇〇七年四月七日）の豊島区役所（東池袋一丁目一八番）付近の様子です。地図に示した＊印は撮影地点を、⬇印は撮影方向を示しています。

いずれの写真も、明治通りを池袋方面から王子方面に向かう路線バスの姿（背景の建物は豊島区役所）ですが、上の写真のバスにはアンテナのようなものが付いています。そうです。トロリーバス（trolley bus）です。四〇才代以上の読者の方々には、実際に乗った方もいらっしゃるかも知れませんね。

トロリーバスとは、道路上の架線から棹状の集電装置（トロリーポール）を用いて集電しモーターを回し、電気を動力として走るバスのことです。見た目は自動車ですが、日本の法規では、無軌条電車という鉄道に分類されます。電気を動力とするため、排気ガスやエンジン騒音がなく、環境にやさしいという特長があります。その一方で、当然のことながら架線のないところでは走ることができず、また、カーブを曲がる時などにトロリーポールが架線から外れてしまい、運行時間が遅れるといった欠点もありました。

トロリーバスが東京の公営交通に初めてお目見えするのは、昭和二七（一九五二）年の上野公園―今井（現江戸川区）間です。その後昭和三一年に品川―池袋間が、昭和三二年に池袋―亀戸四丁目間が開通し、品川―池袋―亀戸―今井間、全長約四七㎞が開通しました。しかし、すでにこの段階で、都心部では自動車による交通渋滞が社会問題化しはじめており、運行スピードと輸送効率の面で劣るトロリーバスは、その後、都電とともに姿を消して行くことになります。昭和四二年一二月に品川―渋谷間が、翌年三月に渋谷―池袋―亀戸間が、同年九月に上野―今井間が撤去され、東京でのトロリーバスの歴史は一六年という短命で終わりました。

（秋山）



千登世橋付近の明治通りを池袋方面に向かうトロリーバス

郷土資料館　なんでもQ&A

もう一つの「池袋・地名の由来」

Q　『かたりべ』68号の「なんでもQ&A」で池袋の地名の由来として、〝袋のかたちをした窪みがあったから〟というのと、〝大きな池があったから〟というのと二つの説があると出ていました。私は、亀の出てくる話を聞いたことがあるのですが、どちらにあるのでしょうか。（しげき）

A　68号でも書かれていますが、〝袋のかたちをした窪みがあったから〟は、『新編武蔵風土記稿』という本に書かれたもの（A説）、〝大きな池があったから〟は、『遊暦雑記』という本に出て来ます（B説）。両方とも江戸時代の文政期（一八一八～二九）に書かれたものです。

さて、お問い合わせの件ですが、実は「池袋・地名の由来」には、もう一つの文献があるのです。亀はそこに登場して来ます。それは、金子直徳という人の書いた『若葉抄』（『若葉の梢』の増補版、一八一一（文化八）年以後の執筆）というもので、次のように記述されています。

住連寺といふ真言寺あり。其西北に田ありて其際に池有。……、此池より亀の袋を負出ける故に池袋といふともつまり、住連寺という寺の西北の池から袋を背負った亀が出て来たので、池袋というようになったとも言われている、というのです（C説）。住連寺は今もある重林寺のことと思われます。

A説では袋があっても池がなく、B説では池があっても袋がない、という問題があります。それに対して、C説は両方とも出てくるという点では、優位にたっているといえます。でも、その代わり、亀が袋を背負っているなど想像しにくいし、そんなことが一度あったからといって地名になるだろうかという疑問が生じます。現実的でなく、こじつけっぽいという弱点があるのです。『若葉抄』では、引用した部分に続けて、この亀についていろいろ書いていますが、ますます、おとぎ話的になる印象を受けます。

この三説を、一つにして解釈しようとする考えもあります。民話として再構成する分にはたいへん結構なのですが、文献そのものの理解としては、①場所が明確に違うこと、②相互に重なる点のないことから、これは無理があります。

それよりも、この三説はほぼ同じ時期に書かれたものであることに注目したいと思います。つまり、あまり差のない時期に書かれた、しかも、地誌や紀行文という地名問題などでは専門といっていい本が、独立した三つの地名の由来を伝えているということです。ということは、すでにこの時期には池袋の地名の由来についての定番的なものは、知られていなかったということになると思います。

結論は、三つのうちどれが正しいかは文献的には分からない、ということになります。地名研究では、こうした文献的なもの以外に、例えば袋のつく地名の共通する地形を探すといったような方法がとられています。池袋についても、そうした方法と合わせて研究していく必要があるでしょう。それでも、最終的は不明としかいいようがありません。いろいろ考えてみるところに地名由来探究の楽しみがあるといえるでしょう。三つの文献はいずれも『豊島区史　資料編　三』に収録されています。皆さんも地名の由来の解明に挑戦してみたらいかがでしょう。

ところで、近年、池袋とふくろう（梟）を、語呂合わせで結びつける宣伝などが多いようです。そのうちに、池袋の地名の由来はふくろうである、という説が盛んになるかもしれません。A、B、Cの説も、発端は案外そんなものだったのでしょうか。

（あおき）

雑司が谷に蒔かれた種 ～旧マッケーレブ邸の100年～

雑司ヶ谷霊園を南に通り抜け不忍通りに続く細い道を下りかけると、左手に旧宣教師館通りが見えてきます。赤レンガを敷詰めた舗道の先に、赤松や大王松、ソメイヨシノなど緑豊な木々に囲まれた白のオイルペイントの外壁と緑の窓枠のコントラストが美しい雑司が谷旧宣教師館があります。この建物はアメリカ人宣教師J・M・マッケーレブの居宅として一九〇七（明治四〇）年に建てられたもので、今年で建築百年を迎えます。

雑司が谷旧宣教師館全景写真（建設当初）

雑司ヶ谷学院生と雑司ヶ谷教会員（大正中期）

マッケーレブは一八九二（明治二五）年に来日し、神田や小石川を拠点に布教活動や慈善事業を行いました。その後、日本の将来は立派なクリスチャンとしての品格を備えた青年を育成することから始まると考え、キリスト教精神に基づく青年教育を実現するために築地居留地内の自宅を売却し、二五〇〇坪の広大な土地を目白台に求めました。しかし当時の日本女子専門学校（現日本女子大学）の校長・成瀬仁蔵は、「女子学校の隣に男子大学生寮は困る」として現在地を代替地として提供します。

マッケーレブはこの経緯を自叙伝のなかで次のように記しています。「私たちは、投機目的で家を買ったのではなく、家が必要だったから買ったのです。一九〇七年に、八百ドルの小さな家（一八九四年に購入）を五千ドルにて売却しました。五百ドルを家族の帰国費用に当て、残りの資金で私が今いる雑司が谷に土地を買い、建物を建てたのです。」

一九〇七年十月、全人格的なキリスト教教育を目的に全寮制を原則とする雑司ヶ谷学院が開校します。雑司ヶ谷学院という校名は友人の勧めで宗教色を抜いたものにしたといわれ、学生は公募により集められました。学生は昼の間はそれぞれの学校で学び、夜間に英語と聖書の授業を必須とするもので、当初寮生十三名、通学生五名から始まりました。一九二三（大正十二）年九月一日の関東大震災で校舎の一部が損壊し、資金的困窮からマッケーレブは学院を閉鎖します。それまでの十六年間には、東京美術学校朝倉文夫門下生で渋谷駅前忠犬ハチ公作者の彫刻家・安藤照、学院の舎監をつとめ後に法政大学教授となった満下竜太郎など、芸術家や法曹界で活躍した人々を輩出し、マッケーレブと親交のあった徳富蘆花の紹介状を持参して入寮してきた者もいました。英語を学べる学校として日本の近代化を志す若いエリート達に人気があったと卒業生たちが証言しています。

テニスをする学院生たち（明治末期）（学院が半分しか完成していない）

マッケーレブは雑司が谷に移住後直ちに布教活動を開始し、学院開設の翌一九〇八（明治四一）年一月二六日には近隣の子どもたちを集めて日曜学校を開きま

す。自叙伝によれば初日は八名の子どもが集まったということです。その翌年にはチャペルが完成し、建設費用の六分の一を日本人信者が献金しています。雑司ヶ谷のチャペルでマッケーレブから洗礼を受けたのは百六十名ほどいましたが、警察の監視が厳しく信者数を過少に報告していたようです。

日曜学校の写真（大正末期）

一九二八（昭和三）年五月、ロサンゼルスからマッケーレブの友人ジョージ・ペパダイン（アメリカ・カリフォルニア州ペパダイン大学創始者）が来日し、マッケーレブが長年切望し続けた印刷機が寄贈されます。同年六月、教会の機関誌『道しるべ』創刊。その後、日米開戦により帰国を余儀なくされたマッケーレブが日本を発つ直前の一九四一（昭和一六）年十月の百六十号にいたるまで十三年間発行されました。『道しるべ』はキリスト教伝道誌としての使命のみならずマッケーレブら宣教師たちの活動や当時の地域の歴史を探るうえで貴重な資料となっています。

雑司ヶ谷幼稚園　保母と宣教師達（昭和初期）

『道しるべ』には雑司ヶ谷教会や関連教会の活動報告の欄があり、創刊号には「雑司ヶ谷幼稚園では保母および助手二名で三〇名の園児を訓育している」という記載がありました。卒園生達は、「マッケーレブさんは走る格好をして"run"と英語を教えてくたり、グースベリーが熟すと私達の口に頬張らせてくれました。」と、宣教師たちの保育内容や遠足、お遊戯会やクリスマス会など幼稚園での日常生活を鮮明な記憶として語ってくれます。

何人かの持ち主が変わったあとの一九八二（昭和五七）年八月、建物を壊してマンションを建設する計画が公示された時、地元に残っている卒園生たちは建物の保存を各方面に訴えました。お寺や神社は文化財としての認識を持たれますが、ふだん使っている商業用や生活する建物は公共の財産としての認識が持たれにくく、歴史遺産という見方も希薄のようで、スクラップ・アンド・ビルト、つまり建てては壊す建築文化の中では、老朽化が進んだ建物は取り壊されていきます。近代の名建築が合理性・経済性そして機能性を求めて次々と建て替えられるなか、日本建築学会は一九八〇（昭和五五）年に『日本近代建築総覧—各地に遺る明治大正昭和の建物—』を公刊し、後世に残したい建築二八〇〇件をリストアップしますが、その中に旧マッケーレブ邸も入っていました。

旧マッケーレブ邸は、①基本的に洋風建築である、②外国人宣教師の設計指導になるものが多い、③木造二階建て下見板張り、④質実な意匠で華美な粧いを持つものは少ない、これらの宣教師館の傾向のほかに、建築的特徴としてベランダにガラス戸をはめ込みサンルームとして利用したことです。日本の風土は雨が多く、季節風や台風などの気象条件に対応するために明治中期以降ガラス戸を持ったベランダの事例がみられるようになったということです。旧マッケーレブ邸は建築史の変遷を知るうえでも貴重な建物といえます。

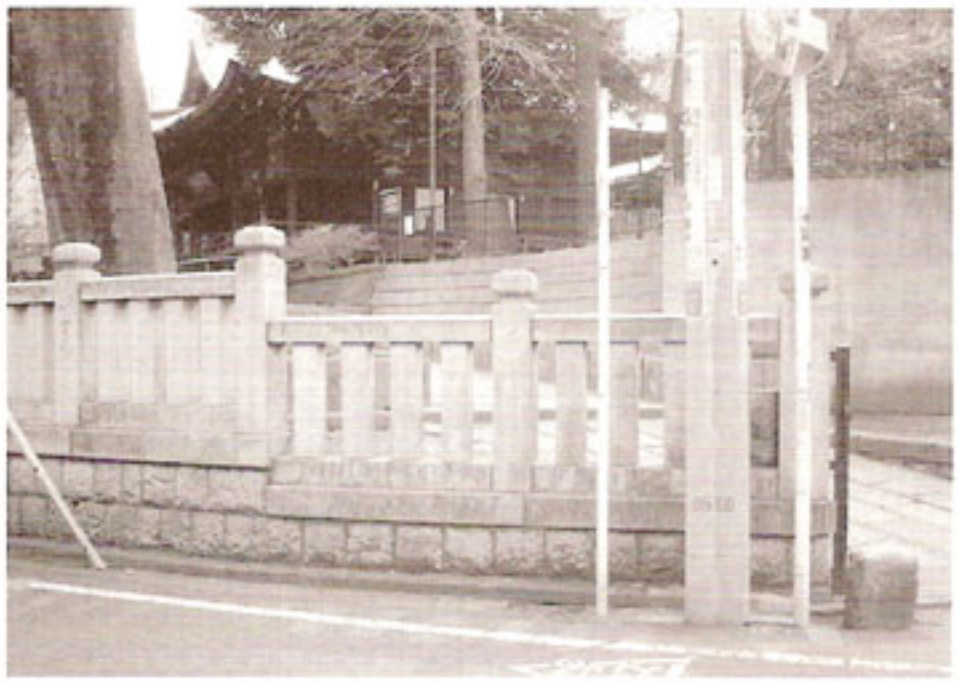
住民の熱意と建築学会の支援により、旧マッケーレブ邸の保存運動はマスコミをも巻き込んだ大きなうねりとなり、一九八二（昭和五七）年十二月、マンション建設公示の四ヶ月後には豊島区が買い取ります。その後建物調査と修理工事を経て、一九八九（平成元）年一月から一般公開を行っています。

（浜地）

豊島をさぐる その15

雑司が谷鬼子母神にある王子電気軌道の玉垣

雑司が谷鬼子母神の東側の境内入口から、境内を取り囲むように玉垣がめぐらせあります。この玉垣は、一九三二（昭和七）年の御会式再興四〇周年を記念して造立されたもので、境内北側の周囲を西側の境内入口（西参道）まで囲んでいます。その西参道側にある玉垣のうち、入口に向かって左側の二本目の親柱（五本ごとに建てられている大きい方の柱）には「王子電気軌道株式会社」という銘が入っています。



王子電気軌道株式会社と雑司が谷鬼子母神には、いったい、どのような関係があるのでしょうか。

王子電気軌道株式会社というのは、現在の都内に残る唯一の都電である荒川線の前身となる会社です。この会社は、東京市内の工場及びその労働力を郡部に移動させる手段として、一九〇六（明治三九）年に、鉄道会社設立の申請を行いました。この時の当初計画では、飛鳥山を起点として、三ノ輪方面に向かうルートと、南下して大塚・護国寺・法明寺を経由して池袋に至るルートが予定されていました。この南下ルートは、飛鳥山から千川上水の測道を通り、そこから折戸通りに入って大塚駅を通過し、旧都電通りを南下して護国寺に至り、さらに護国寺の西側に廻り、雑司が谷霊園の北側を通過して、現在の東通りを通って池袋駅近くに至るというものでした。

このように、鉄道敷設免許の申請段階では鬼子母神は経由ルートに入っていなかったのです。このルートの内、大塚駅以南の部分は許可が下りる前に取り下げられますが、王子電気軌道の敷設免許は一九〇七年に許可されます。

免許は下りたものの、資金難などから鉄道敷設工事の着工が遅れていましたが、一九一一年（明治四四）年に、ようやく第一区路線である大塚―飛鳥山間が竣工しました。つまり、王子電気軌道の最初の開業路線は、官営鉄道の大塚駅と東京近郊の景勝地である飛鳥山とを結ぶ「観光鉄道」として誕生したのです。

その後、王子電気軌道は、飛鳥山の麓の王子を基点として、三ノ輪方面に営業路線を延ばし、企業収益も順調に伸びていきました。

一方、大塚駅以南のルートは、鬼子母神・戸塚を経由して内藤新宿へ至るという「新宿線」と呼ばれる、現在のルートに変更され、こちらは一九一二（明治四五）年に特許がおります。

大塚―飛鳥山間の開業から遅れること一四年。一九二五（大正一四）年に大塚―鬼子母神間が開通します。つまり大塚以南の最初の開業ルートも、東京近郊の参詣地として有名な鬼子母神とを結ぶことから始まったのです。ですから、王子電気軌道にとっては、鬼子母神の参詣客の増加は、鉄道収益に直結していたわけです。王電が玉垣の奉納に協力したのにはそんな理由があるのかもしれません。

ちなみに、王電は、その三年後の一九二八（昭和三）年に面影橋まで延伸し、終点の早稲田まで延びたのは一九三〇年でした。

（伊藤）

郷土資料館・雑司が谷旧宣教師館
二〇〇七年度事業のごあんない

郷土資料館

◎ミニ企画展「(仮称) 戦争を考える夏 ―展示編―」

◇七月二〇日(金)～一〇月一四日(日)

▽Ⅰ モノに刻まれた空襲

Ⅱ 記録に刻まれた空襲

Ⅲ 記憶に刻まれた空襲

◎企画展―(仮称) A LA SUGAMO (ア・ラ・すがも) ―中山道と巣鴨地域―」

◇一〇月二四日(水)～一二月九日(日)

▽現在の豊島区巣鴨地域は、とげぬき地蔵(高岩寺)が面する地蔵通り商店街を中心に大いに賑わっています。しかしながら、巣鴨地域は、もともと江戸の北側に位置する一農村でした。今回の企画展では、江戸時代の巣鴨地域に光をあて、おもに中山道との関わりについて考え、様々な資料を展示していきます。

▲講座▼

◎歴史講座「OH!江戸でござる ―江戸人のヒンカクをさぐる―」全五回

◇日時および内容

第一回 六月二日「江戸の教育事情」講師：市川寛明氏(江戸東京博物館学芸員)

第二回 六月九日「江戸の時刻事情」講師：浦井祥子氏(日本女子大学非常勤講師)

第三回 六月一六日「江戸の墓地事情」講師：西木浩一氏(東京都公文書館史料編さん係)

第四回 六月二三日「江戸の出版事情」講師：湯浅淑子氏(たばこと塩の博物館学芸員)

第五回 六月三〇日「江戸の恋愛事情」講師：氏家幹人氏(歴史学者)

◎歴史講座「(仮称) 戦争を考える夏 ―講座編―」全3回

◇開催日時：八月頃

▽例年開催している地域からアジア・太平洋戦争を考える講座。展示と連動させて実施します。講師等未定

▲刊行物▼

◎郷土資料館だより「かたりべ」86号～88号

▽五月・九月・一二月・三月刊行予定

◎郷土資料館調査報告書第20集「集団学童疎開資料集(10)」

▽二〇〇八年三月刊行予定

◎郷土資料館研究紀要「生活と文化」第17号(二〇〇七年度年報付)

▽二〇〇七年一二月刊行予定

▲その他▼

◎臨時休館

◇企画展の前後、展示替えのため臨時休館します。

□七月一〇日(火)～七月一九日(木)

□一〇月一五日(月)～一〇月二三日(火)

□一二月一〇日(月)～一二月一八日(火)

雑司が谷旧宣教師館

▲講座▼

◎『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのお話し会

◇毎月第一土曜日 午後二時から

▽ことし五年目を迎える、詩人小森香子さんによる読み聞かせの会

◎初心者のためのデジカメ講座「旧宣教師館の春を撮る」

◇四月一八日・二五日、五月二日・九日

百周年記念マンスリーリレーコンサート

◎ガーデンコンサート

◇五月一三日、六月一六日～十一月まで。

◎東京文化財ウィーク参加事業

◇一一月上旬

事業の実施内容・実施日時は変更する場合があります。実施が確定した事業については、『広報としま』または、当館ホームページ等でお知らせいたします。

合併号特別企画『資料館の法則』の法則

右下の四コマ漫画をご記憶の方はいらっしゃらないかと思います。実は、記念すべき「資料館の法則」の第一話です。

『資料館の法則』は一九九五年六月に刊行された『かたりべ38』にはじめて登場しました。登場人物のほとんどは実在の人物をモデルとして描かれており、郷土資料館の職員をよくご存じの方ならおおかたの見当がつくと思います。

はじめは軽い気持ちで連載を始めましたが、実際に描き始めてみると想像以上に苦しい作業でした。アイデアをひねり出し、それを四コマに構成するのはかなりの苦行でした。それに、他館のいじわるな学芸員から「この話は愚痴ではなく利用者批判だね」などと責められると、毎回「今回で終わり」という思いでした。

それでも近隣の博物館の学芸員仲間から「すごく面白かったよ」などといわれると、気をよくして「もう少し続けてみるか…」とも思ったものです。しかし、とうとう第七話で精魂尽き果て、44号で無期限の休載ということになりました。

休載中には、中部地方のとある「博物館だより」で、お会いしたこともない学芸員の方から復活へのエールをいただき、大変うれしい思いをしたこともありました。

そして、二〇〇二年五月の66号から連載が再開され、78号の第二〇話をひとくぎりとして再度の休載となりました。

ちなみに、偶然ではありませんが第一話と第二〇話のモデルは同一人物です。

今回は合併号ということで、一号かぎりの復活をしました。そして三度目の長〜い休載に入ります。それでは、ごきげんよう、さようなら！（学芸プロ）

編集後記

年間四回の定期刊行を続けるよう努力してきましたが、諸般の事情により合併号となってしまいました。深くお詫び申し上げます。

実は「かたりべ」が合併号となってしまったのは二回目です。いまから一五年前の一九九二年三月に、24・25号の合併号を発行しています。

なぜか、この時の編集担当と今回の編集担当は同じなのです。今号の編集中、一五年前の悪夢が甦ったことは言うまでもありません。86号にもおよぶ「かたりべ」の長い歴史の中で、たった二回の失態の当事者になるとは。

このような事態に立ち至ったのは担当者が「かたりべ」編集の適性に欠けるということでしょうか？（いとう）

かたりべ
・
No.85・86合併号
・
2007年5月1日
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話 03-3980-2351
http://www.museum.toshima.tokyo.jp